

教育の職業的意義

— 若者, 学校, 社会をつなぐ —

本田由紀 著

著者は、東京大学大学院教育学研究科で、総合教育科学専攻比較教育社会学講座等を担当している教授である。特に、教育システムと他の社会システムとの関係とその変化に関する実証的・理論的研究をテーマに、若年労働市場、家庭教育、教育のレリバンスを研究している社会学者である。

本書は、日本で長く見失われてきた「教育の職業的意義」の回復を、広く世に訴えることを目的としている。それは、問題が山積している現代の日本社会の再編という大きな課題に、教育という一隅から取り組もうとすることである。

第1章 なぜ今「教育の職業的意義」が求められるのかでは、増加する若者の非正規社員を取り上げ、バブル経済が崩壊するまで、若者が、労働市場全体の中で恵まれた立場とみなされてきた従来の「常識」が、もはや通用しなくなっていると指摘している。さらに、非正規社員がおかれた状況の厳しさは、賃金水準が低いだけではなく、いったん非正規社員の世界に入ると、その後に正規社員の世界に移ることが難しいとされている。正規社員と非正規社員のいずれについても働き方が厳しくなっている現状を改善していくためには、一定のジョブと一定のメンバーが確保され、両者の間の強固なバリアをなくしていくことが必要だと述べている。「教育の職業的意義」を現代の文脈に即して再構築すること、それは、仕事の世界の変化に端を発して随所で綻びがあらわになりつつある日本社会を立て直すための、重要な部品のひとつなのであると述べている。

第2章 見失われてきた「教育の職業的意

義」では、「教育の職業的意義」の低下をもたらした社会経済的な諸条件と、現代におけるそれらの条件の変化および「教育の職業的意義」の必要性の再浮上という変動を、位置付けている。仮に学歴分布が固定されると想定すれば、学歴構成の中で相対的に下位に位置することになる高卒者や高卒未満の者が、労働市場の中で酷い扱われ方をすることを防ぐために、教育において職業的な準備・装備を与えた上で社会に送り出し、またその後も継続的に職業能力や教育歴を向上させる機会を拡充する必要がある。

第3章 国際的に見た日本の「教育の職業的意義」の特異性では、他の社会との比較により、日本社会の「教育の社会的意義」の特異なまでの低さを確認することを目的としている。世界青年意識調査等の調査結果からもたらされている教育段階別の要因を検討し、世界標準から取り残されている問題意識を喚起している。特に、高校段階において、日本の「教育の職業的意義」が極めて低いという状態をもたらしているのは、専門学科高校の量的比重の小ささにあると考えている。

第4章 「教育の職業的意義」にのっての障害については、「キャリア教育」という施策・理念、またそれと密接に関わる「人間力」や「生きる力」の概念や発想は、「教育の職業的意義」の取組を阻害する危険性をも含んでいることをデータに依拠しつつ議論している。

第5章 「教育の職業的意義」の構築に向けてでは、職業教育の現状は、地域や教育機関などによって大きな多様性を含んでいるし、また、いかなる現状であっても無条件に賞賛できるわけでもない。私たちは、現状の中に手掛かりを探りながら、新しく「教育の職業的意義」を構築していく段階にある。その具体的なキーワードは「柔軟な専門性」にあると指摘している。

(ちくま新書, 224頁, 820円) (長田利彦)